

第3学年 あまりのあるわり算

1 単元 あまりのあるわり算（9時間完了）

2 本時の指導

(1) 目標

問題場面に合わせて余りの処理の仕方を考え、余りを切り上げて処理することを図、式、言葉を使って説明することができる。（思考・判断・表現）

(2) 準備

① 児童 教科書、ノート、数図ブロック

② 教師 タブレット、電子黒板、観覧車の絵、板書用挿絵、フラフープ

(3) 本時の授業における「学びを深めた子供の姿」の定義

問題文から題意をつかみ、余りを切り上げて処理しなければならない理由について、図、式、言葉を結び付けながら説明する姿

(4) 主体的・対話的で、深い学びを達成するための手だて

① 学級全員で観覧車に乗るという児童にとってイメージしやすい問題にすることで、余りを切り上げる必要性に気付くことができるようにする。

② 単位に着目して考え、それぞれの数字が何を表しているかを明確にすることで、余りを切り上げる理由について説明することができるようにする。

(5) 展開

時間	児童の活動	教師の手だて・支援
導入 (8)	<p>1 問題文を読み、分かることや求めること、前時までの問題との違いを考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>4組のみんなで観覧車に乗ります。 ゴンドラは1つ4人乗りです。 ①女子16人が乗るにはゴンドラはいくつありますか。 ②男子18人が乗るにはゴンドラはいくつありますか。</p> </div> <p>・余りますかという言葉が入っていない。 ・1つのゴンドラには4人乗れる。 ・女子は16人で男児は18人だよ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 問題文とともに観覧車の挿絵を提示し、1台のゴンドラが4人乗りであること、男女それぞれ全員が観覧車に乗ることを確認する。 前時までの問題文を提示し、余りを問う言葉がないことに着目する。 男女それぞれで答えを求めることを指示する。
課題 (2)	<p>2 本時の課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 5px 0;"> <p>みんなが乗れる台数を調べて説明しよう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習課題を板書する。
展開 (30)	<p>3 問題文から読み取ったことをもとに、図、式、言葉を使って全員が乗れる台数を考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>・観覧車の絵に数図ブロックを乗せると、女子は4人ずつぴったり乗れるけど、男子は余りが出るよ。 ・$16 \div 4 = 4$なので女子はゴンドラが4つ。 ・男子は$18 \div 4 = 4$あまり2になる。 ・余った2人もゴンドラに乗らないと、みんなが乗ることにはならない。 ・4人で乗るゴンドラが4つ、2人で乗るゴンドラが1つだから、合わせて5つ。</p> </div> <p>4 ゴンドラの台数の求め方を話し合う。</p>	<p><主発問></p> <ul style="list-style-type: none"> 「ゴンドラがいくつあればみんなが乗れるか考えて、図、式、言葉を使って説明しましょう。」 <p><個人思考の場></p> <ul style="list-style-type: none"> 求め方は児童に委ね、必要に応じて観覧車の絵を渡す。 様々な方法で考えを説明するよう指示する。 式のみで答えを求めた児童には、それぞれの数字に単位を付け、何を表しているかを考えるよう伝える。 児童の様子を見て適宜ペアやチーム学習を取り入れる。 <p><対話の場></p>

<p>整理 (5)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 男子は $18 \div 4 = 4$ あまり 2 になる。みんなが乗れる台数を調べたいので、余った 2 人も乗らないといけない。だから、$4 + 1 = 5$ で答えは 5 つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉から式に表したり、図から説明をしたりと、様々な方法が出るように指名する。 同じ考えでも色々な児童が説明する機会を設ける。
	<ul style="list-style-type: none"> 16 を 4 ずつ丸で囲むと、4 個の丸ができる。18 を 4 ずつ丸で囲むと、4 個の丸ができて 2 人余る。今回の問題は残りの 2 をそのままにしてはいけないので、2 だけ丸で囲んだ。 男子は余りが出してしまうので 3 人ずつ乗れば、$18 \div 3 = 6$ で 6 つのゴンドラにぴったり乗ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ゴンドラが 4 つでは不正解な理由を明確にし、余りの 2 をそのままにしてはいけない理由について考える時間を設ける。 フラフープをゴンドラに見立て、4 人ずつ輪の中に入れて答えを確かめる。 18 人の場合は、3 人ずつ乗れば余りなく乗ることができることに気付いた児童がいれば指名する。
	<p>5 類題に取り組み、理解を深める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 類題では、余りの大きさが変わっても答えを 1 増やすことが理解できたかを確かめる。
	<p>5 組も観覧車に乗りに来ました。3 1 人が乗るには、ゴンドラがいくつありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> $31 \div 4 = 7$ あまり 3 になる。余りの 3 人も乗るのでゴンドラを 1 つ増やすから、$7 + 1 = 8$ で答えは 8 台。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活場面で余りをそのままにしてもよい場合と、余りを処理しなければいけない場合について触れる。 余りを求める問題と余りを処理する問題の違いを明確にし、問題文を正しく読み取ることの大切さに触れる。
	<p>6 本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 余りについて考えたことがなかったけれど、問題によっては余りの分も考えて、数を増やさないといけないことが分かった。 式だけではなくて、図を書いたり数図ブロックを動かしたりすると問題が分かりやすい。 	<p><振り返りの場></p> <ul style="list-style-type: none"> 本時でよく出てきた言葉を振り返ってから、児童の言葉を使ってまとめをする。 問題によっては余りをそのままにせず、切り上げて考える必要があることに気付いた児童を称賛する。

(6) 評価

図、式、言葉を使って余りを切り上げる必要性について説明し、問題によっては余りの処理が必要であることに気付くことができたか。(活動 3、5 の記述、活動 4 の児童の様子から)